

## 編集後記

ひと頃程ではないが、街にクリスマス・キャロルが流れる時季となった。今年1年の仕事の片を付けたいと思う一方で、来年度へ継続する仕事の段取りや、新しく始めたい仕事の準備などを考えたりして、何となく気ぜわしい頃である。

本年はいろいろの出来事があった。総選挙では自民党が圧勝し、保守化の傾向が改めて注目された。5月のサミットでは、東京の町の交通規制や警備ばかりが印象に残った。しかし、何と言っても最大の事件は大島三原山の噴火であろう。噴火と溶岩流はテレビで見ていると迫力満点であった。1万人以上の人達の避難が整然と行われたということで、危機管理の方法が注目された。考えてみると、臨床医学こそ正にこの危機管理の学問と言うべきかも知れない。

この1年間、本誌は仲々充実した誌面を提供して来たと思う。論文のレフェリー制度も益々整備され、質の良い原著の掲載が続いている。本号にも白日先生の histiocytic necrotizing lymphadenitis に関する論文、東村先生らの Rifapentine の抗菌作用についての論文が掲載されている。Histiocytic necrotizing lymphadenitis は本邦で発見、命名され、その後、欧米でも報告が続くようになった疾患であるが、原因は未だ不明である。今後の研究の進歩が望まれる。Rifapentine は Rifampicin の新しい誘導体ということのだが、新しい薬剤の開発は、耐性菌の制圧に大きな福音となる。

総会シンポジウム「肺結核後遺症としての続発性呼吸器感染症」も諸先生の御努力で立派にまとまっている。時機を得たシンポジウムであり、会員諸氏に役立つものと思う。

特筆すべきは、「結核医療の基準」に対するお二方の意見が通信欄に取り上げられたことで、これは欧米諸誌にある Letter to the editor に相当するものと思われる。今後、この欄を通じての情報交換が益々活発になり、本誌が会員諸氏にとって、より身近かなものとなることを希望したい。

最近の新聞に、医師が結核罹患のまま診療を続けたため、患者さんの再検診を行ったという報道があった。これから冬に向い、会員の皆様の御健康をお祈りします。

(三方淳男)

## 正誤表

結核第61巻10号におきまして下記のような誤りがありましたことを深くお詫びし、謹んで訂正致します。

515頁 Key words: 中

誤 Necessity, counter measures of Education for Tuberculosis

正 Concrete measures of Medical Education of Tuberculosis

誤 結核医学教育の具体

正 結核医学教育の具体策

結 核 第 61 巻 第 12 号 (12月号) 毎月 1 回 15 日発行

昭和 61 年 12 月 10 日 印刷 年会費7,000円 (1部売り定価850円)

昭和 61 年 12 月 15 日 発行 (振替) 東京 4-53756

編集兼  
発行人 島尾忠男

発行所 日本結核病学会 204 東京都清瀬市松山3-1-24  
結核予防会結核研究所内 電話(0424)92-2091

THE JAPANESE SOCIETY FOR TUBERCULOSIS

c/o Research Institute of Tuberculosis, Japan Anti-Tuberculosis Association,  
3-1-24, Matsuyama, Kiyose-shi, Tokyo 204 Japan.

印刷 依田印刷株式会社